

第 2 回近畿周産期精神保健研究会開催のご挨拶

日本周産期精神保健研究会は、2009 年第 54 回日本未熟児新生児学会が横浜で開催された際、11 月 30 日に有志で「キックオフの集い」をもったことが出発です。この時の設立発起人代表である側島久典埼玉医科大学小児科教授が、現在この会の理事長を務めています。その後 2013 年 11 月 2 日、第 1 回日本周産期精神保健研究会が大阪で窪田昭男会長（大阪府立母子保健総合医療センター）の下で盛大に行われました。その挨拶で「子どもと家族の幸せを支えるためには、医学的アプローチに加え、精神保健的アプローチ、すなわち、胎児・赤ちゃんのご家族の繋がりを最優先させながら、医師、看護師、助産師のみならず、臨床心理士、遺伝カウンセラー、ソーシャルワーカー、保健師、理学療法士あるいは保育士など周産期に関わるすべての職種の人々が、互いに連携をしながらそれぞれの持てるものを注いで、胎児・赤ちゃんご家族のこころの健康を支えるアプローチが必要なのです」と述べています。その開催からもっと身近でそうした研究会を持って欲しいという要望から 2016 年 2 月 21 日第 1 回近畿周産期精神保健研究会を窪田昭男会長（現和歌山県立医科大学第二外科、近畿周産期精神保健研究会会長）が多くの参加者を得て開催しました。

そして、第 2 回を私の方で開催するようにとの窪田会長からの依頼があり、お引き受けいたしました。今回の主題テーマを「多職種協働で支援する Patient & family-centered care(本人・家族中心のケア)」とさせていただきます。本人・家族中心のケアの大切な 4 つのキーワードは、「尊厳・尊重」「情報共有」「参加」「協働」です。すなわち「胎児や赤ちゃんの最善の利益」を中心に、本人の尊厳を尊重し、ご家族と情報を共有し、決定にも参加していただくと同時に、ケアにも協働であたるという、今後の医療の中で非常に大切になる概念だと思います。

今回米国 Duke 大学医学部小児科准教授 Margarita Bidegain 氏が「Perinatal multidisciplinary approach for palliative care」（周産期における多職種協働による緩和ケアアプローチ）という特別講演をしてくれることになりました。また「多職種協働で胎児のいのちをどのように大切に支援するか」「多職種協働で支援する NICU からの地域生活移行」という二つの大切なシンポジウムを準備委員の方々が企画してくれました。同時に準備委員の企画でワールドカフェも開催し、子どもの最善の利益を中心に家族の望むケアについて自由にタブー化せず多面的に語り合ってください機会も用意しましたので、是非多くの皆さまのご参加を心からお待ちしています。



第 2 回近畿周産期精神保健研究会
会長 船戸 正久